

## 1. 挨拶 一口頭試問と記憶の正確さー

最近お茶会で問答を体験したが、満足な答えができなかった。短期間であるが狭い範囲の内容なので記憶し答えられると思っていたのが大間違いであった。それで4半世紀前、通っていた専門学校での口頭試問体験を思い出した。’この骨の名前は?’’中足骨です’中手骨と記憶してきたのに違った答えが口からでたことを先生に指摘されるまで気づかなかった。頭の中の記憶と口から出る言葉は一致しないことがあるということに気付かされた。合格はしたものの苦い経験だった。

試験は筆記式で、人前で発表するときは資料を見ながら、という経験はあるものの、何も持たずの質疑応答試験は確かな情報と知識を記憶している事が必要は言うまでもない。今回の経験から正確に記憶を定着させるには口に出して暗唱し耳で確認させる事が今の私にとって必要だと痛感した。特に歳のせいでボケていると記憶も曖昧になるものだから。

## 2. 今年度の企画事業

### 3 組企画 『岩手大学学内 カンパニー の紹介と イーハトーヴ協創ラボ 見学会』

- 1 日 時：11月13日(木) 午後2時～午後4時
- 2 場 所：岩手大学 学生センターA棟及び中央食堂2階
- 3 参加者：4名(小野寺 深澤 熊谷 千種)
- 4 説明・案内 岩手大学理工学部ものづくりEF 起業家支援室 特任教授 対馬登

岩手大学学内カンパニーは平成21年度から始まり15年目を迎える全国に例の無い取り組みで当会の対馬さんが特任教授として起業家支援スタッフの一員であることから今回の見学会の

企画／案内を依頼し実現したものです。始めに学生センターA棟で学内カンパニーとして24年度認定された9つのカンパニーの活動状況や成果の説明を受けました。既に地元企業から依頼を受けてパッケージデザインやロゴマークデザイン等の受注実績を上げているカンパニーやビール用大麦の栽培を行いベアレン醸造所とのプロジェクトにより岩手県産 100%

ビールの生産販売を行っているカンパニ等企业活動を実践しているカンパニーが多く、バーチャルからさらに一步踏み込んだ活動をしていると感心させられました。

次に中央食堂2階に移動し、イーハトーヴ協創ラボを見学しました。ここは学生や教員そして地域の人々が集まり自由な発想によりクリエイティブなビジネスコラボレーションが生まれるコワーキングスペースとして10月中旬に整備されたもので、企業×学生、企業×大学等の連携交流ス



ースとなっていました。近年各大学では、教育の多様化が進みそれに合わせてカリキュラム・環境・設備等が整備されています。何処でどのような教育を受け学びたいかの選択肢が増えていて今の学生を羨ましく思います。岩手大学のこのような環境下で様々な経験を積んだ学生さんが将来社会人としてどのような活躍をするのか楽しみに感じた見学会でした。

(千種記) 3. 会員の移動

退会会員 無し

名入会会員 無し

4. コラム 「後三年の合戦」

今回は岩手を離れて、秋田県の歴史物語を紹介しよう。これは岩手がほこる世界遺産である、奥州平泉の黄金文化が花開く前の、避けては通れない歴史の一ページだからである。

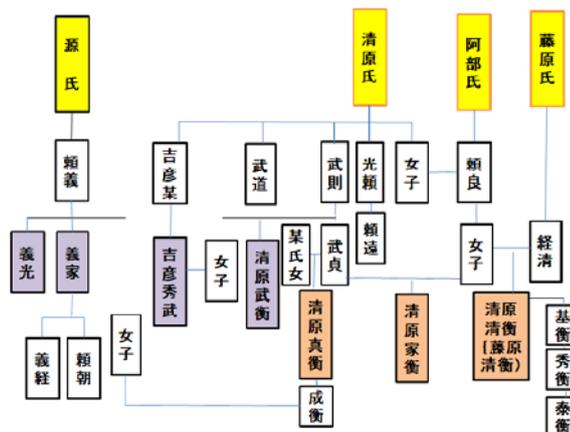


【後三年合戦金沢資料館】

「前九年の役」の後を受けて北東北一帯を掌握した清原一族の骨肉の争いであった、「後三年の合戦」である。まずは、合戦の舞台となった横手盆地について簡単に紹介しよう。

横手盆地は、かつては出羽三北郡と呼ばれていて、南より雄勝郡（湯沢市、羽後町）、平鹿郡（横手市）、山本群（大仙市、美郷町）で構成される。今回は後三年の合戦の中心人物である清原氏の居城のあった横手市周辺を訪ね、後三年の合戦の終焉の地である金沢柵のあった美郷町を訪ねてきた。この美郷町では、「道の駅美郷」で関連資料の有無を聞き、そこからすぐ近くにある「後三年合戦金沢資料館」を紹介され、訪ねてきた。横手市、美郷町ともに、後三年の合戦を取り巻く遺跡群の発掘調査に熱心であり、

様々な発掘調査が実施されて来た事が伺える。とりわけ、清原氏が横手盆地の盟主として繁栄していた時の所在が大鳥井山遺跡であり、日本最古の武士の館として国指定史跡として認定された。また、後三年合戦関連遺跡のある横手市周辺は、文献・絵画資料と考古資料を比較検討することが出来る稀有でかつ重要な地域であり、東北地方の



【登場人物の概要】

歴史的に概観できる重要な地域といえるのである。それでは本題にはいろいろ。後三年の合戦は、1083年～1087年にかけて、前九年の役の結果を受けて、北東北で勢力を誇るようになった清原氏の内紛に、陸奥守として赴任した源義家が介入して起こった日本史上においても名高い戦であり、横手市・美郷町を舞台に繰り広げられ究極の兄弟喧嘩であった。図に主な登場人物の概要をしめした。オレンジ色に塗りつぶしたところが、後三年の合戦の主人公たちである。前九年の役の結果を受けて、清原真衡（さねひら）は北東北全土を支配するようになった。この支配地は後の平泉文化を开花させた奥州藤原氏の支配地に匹敵していた。この時の中心地は金沢柵（現在の横手市から美郷町の周辺）であった。当時の治政は一族の合議制で行うのが常道であった。これに対して真衡（さねひら）は従来からの仕組みを変えて、後の平氏や源氏のような、棟梁に権力を集中させた武士団への変革をめざした。そのため、真衡は名門である海道平氏から重衡を養子に迎え、源義家の妹を成衡（なりひら）の妻にすることを画策した。しかしこれに対して、一族の長老である吉彦秀武（よしひこ ひでたけ）と、弟である清衡（きよひら）と家衡（いえひら）が反発し、「後三年の役」の幕が開いたのである。また、次のような逸話もある。ある日清原氏の長、真衡の養子・成衡が結婚をした。そこに真衡の叔父の吉彦秀武が祝いの品を持ってやってきた。しかし真衡は碁に夢中になって秀武に気づかない。無視されたと思った秀武は祝いの品をぶちまけて帰ってしまった。真衡は叔父がいきなりやってきて祝いの品をぶちまけた事を、結婚へのあてつけだと思ったのだろうか。すぐに兵を集めて戦を始めようとした。秀武は秀武で、元々真衡と仲が悪かった清原家衡と清衡に通じて反撃体制を整えたというものである。いずれにしても、親戚同士の内紛でしかない。事が大きくなったのは、陸奥守として赴任してきたのが、頼義（よりよし）の息子の源義家（みなもと よしいえ）であった。真衡は義家を接待して味方につけて、家衡・清衡を撃退し、家衡・清衡軍はついに降伏したのである。しかし勝利の余韻もつかの間、真衡は病で急死してしまった。衝撃的な真衡のまさかの死後、義家が間に入って家衡と清衡に土地を分配した。しかしこの分配に不満をもった家衡が清衡の家に攻めて来た。清衡は妻子を殺されてしまうが、どうにか逃げ延びて義家の元へ助けを求めた。だがこの時は冬だったので、清衡・義家軍は負けてしまったのである。家衡たちは勢力を拡大しつつ金沢柵（かねざわさく・軍事拠点となる城）に陣を張った。金沢柵は前九年の役の時に頼義たちが築いたものである。義家



【後三年の合戦前後の勢力範囲】

【後三年の合戦前後の勢力範囲】

軍は翌年（寛治1）の9月に再び金沢柵（かねさわのき）を攻め、日本初といわれる兵糧攻めで糧道を断ち、11月攻略、武衡らを討ち果たした。義家の弟新羅三郎（しんらさぶろう）（源義光（よしみつ））が官をなげうち都から救援に駆けつけた話は有名である。これにより奥羽の安倍、清原両氏の地盤は清原清衡が継承する事になった。後に清衡は藤原の姓を名乗り、奥羽の覇者として平泉藤原氏三代の栄華の基礎を築いた。一方源義家はこの戦の顛末を、朝廷に報告した。しかし「前九年の時は、安倍氏の懲罰という朝廷からの命令があったけど、この戦はただ単に親戚同士の喧嘩に義家が勝手に関与しただけでしょ」と言われてしまい、朝廷から恩賞は出なかった。とは言っても、義家は坂東武者も数多く動員してしまっていたので、恩賞ゼロだと坂東武者からの不満が出てくるので、義家は坂東武者たちの恩賞を私財から出すことにした。この出費で義家は財政的に困窮状態に陥ったようだが、自分の身を削ってまで恩賞を出してくれた義家に感激し、恩義を感じた坂東武者は源氏の家人となったのだ。そしてこの合戦が源氏の東国武士団主従化のいっそうの契機となったことは疑いない。合戦後、源氏の武門の棟梁（とうりょう）化が一段と進んだことは、朝廷が諸国の百姓が義家に田畠（でんばた）の公驗（くげん）（土地の所有を認める官符の証明書）を寄進するのを禁じ、義家のたてた荘園（しょうえん）を停止させたことからわかる。この合戦は、源氏が東国に確固たる地盤を築き、後の鎌倉幕府創設の基礎を定めた点でとくに注目される。また後三年の合戦については、次のような三つの逸話が残されている。第一は「納豆伝説」である。「金沢」説は後三年の合戦のとき、源義家が農民に煮大豆を差し出させたところ、農民たちは急ぎのために入れ物が間に合わず、俵に詰めて差し出しました。これが数日たつと香りを放って糸を引くので、食べてみると意外においしかったため食用とし、農民たちもやがてこれを知って、自らも作って後世に伝えたという。この他に「大家」説と「沼館」説があるが、いずれも源義家が命じた煮大豆を俵に入れて発酵したものであるという説である。道の駅でもこれにちなんだ納豆が販売していた。第二は「雁行の乱れ伝説」である。源義家が金沢柵に進軍中、立馬郊付近にさしかかると、一行の雁がにわかにならぶ列を乱して飛び散りました。馬を立ててじっと見ていた義家は、かつて習った兵法を思い出し、「伏兵があるにちがいない」と付近を捜させたところ、三十数騎の伏兵を発見し、これを全滅させることができたというものである。そして第三は「片目カジカ伝説」である。わずか16歳で初陣し、多くの手柄を立てた鎌倉権五郎景正は、金沢柵を攻撃する際に、敵に右目を射られてしまうが、その敵を射殺した。同僚の為次がその矢を抜いてやろうと額に足をかけたところ、景正は刀を抜いて「生きながら面を踏まれるのは耐えられない」と為次を下から突こうとする。為次は無礼を詫びて、改めて膝を屈してその矢を抜いてやり、景正は厨川の清水で傷を洗い清めた。その後、厨川から右目の見えない片目のかじかが出るようになり、景正の武勇に感じた珍魚として有名になり重宝されたという。このように、「後三年合戦」は日本史における中世武家社会形成の様因と位置付けられ、源義家を中心とする源氏の武士団の結束とその躍進はめざましく、後の鎌倉幕府を起こ

した源頼朝へと引き継がれていくのである。横手市を舞台に展開された、「後三年合戦」や清原氏の存在なくしては、平泉藤原氏の黄金文化の開花は無かったといえるし、さらには源頼朝の鎌倉幕府の武家社会の時代は無かったかもしれないという事である。当人達（清衡や義家）は後の世のことまで考えてはいなかったと思うが、結果的に歴史のターニングポイントとなった事は言うまでもない。北東北の片田舎で起きた内紛が、その後の平泉の黄金文化の隆盛や、鎌倉幕府開幕のきっかけとなった事は、とても因縁めいていて、後の世には、手を組んで一緒に戦った、藤原一族を、鎌倉幕府の源頼朝が倒してしまうという、何か因縁めいた不思議な感じがするのは筆者だけであろうか？



【道の駅美郷】

さて、今回訪問した美郷町は、横手の隣に位置し、国道13号線を北上すると、比較的新しい道の駅「道の駅美郷」が見えてくる。中は野菜や米などを中心に季節の果物も豊富であった。さらに隣にはスポーツ用品の専門店「mont bell(モンベル)」が立地していて、この地を訪れた時は是非立ち寄ってみてはいかがでしょうか？

## 5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈だよりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail [mitshida.9201@gmail.com](mailto:mitshida.9201@gmail.com)

## 6. 編集後記 「もち文化」

正月にもちを食べた方も多いと思う。一般的にお雑煮で頂く方が多いと思う。我が家でも餅の準備は怠りなく、最近はパック餅を重宝している。我々少年だった頃は、各家々で臼と杵で餅つきをした記憶がある。いつの頃からか餅つき機になって、杵と臼は物置の肥やしになってしまった。そして昨今はパックの餅である。カビが生えないので一年中新鮮な餅が食べられるようになった。岩手でのもち文化といえば一関が有名で約300種類の餅料理があるという。また餅歳時記なるものがあり、一年中何かにつけて餅を食していたようだ。過日テレビで玄米餅というのを初めて知った。早速アマゾンで調達して食してみた。なるほど多少粒々感があって意外と美味しくいただいた。思うに旧南部藩の花巻以北の地域はそばを代表とする「雑穀文化」であり、旧伊達藩の県南部は「もち文化」ではないかと思う。時代の流れでその製法については致し方ない部分はあるが、食文化としてはいつまでも残していきたいものである。

志田